

<論 文>

移民とその社会経済的出自階層の関連
について——ドミニカ島の事例——

江口 信 清 (京都大学大学院)

ABSTRACT

Nobukiyo Eguchi: "Migrants and Socioeconomic Conditions of Migrant-sending Households: A Case Study of Dominica, West Indies."

This article is aimed to analyze a basic question on migration: "why and what sort of people migrate abroad." West Indian societies have been complex societies formed by various ethnic migrants from various parts of the world especially since 1492. Until emancipation the wave of migrants was directed toward the Caribbean. However, after emancipation the direction has changed. Such an international migration has been studied from various viewpoints. Yet, the basic question which this article is aimed has not been answered appropriately.

Data used in this article was collected among peasants in a small village community of Dominica by the author during his fieldwork between June 1982 and July 1983. Two important conclusions are drawn with regard to socioeconomic conditions of migrant-sending households. Firstly, those rated as the middle ranks among villagers have been sending migrants abroad. Secondly, these migrants are especially concentrated on the upper-middle rank households. They are correlated with "conservative attitude." Their average size of landholdings and

income are much higher than those of the total household of the village and the middle rank. At the same time, their occupations are limited within two types: either only self-employed agriculture, or self-employed agriculture plus miscellaneous jobs such as carpentry and the like. Agriculture and migration are both “traditional” life style to peasants in this area. As long as peasants maintain their “traditional” life style, they cannot expect much return, but they do not lose much on the other hand. Thus, migration has been chosen as a part of the most favorable adaptive-strategies among the upper-middle ranks.

I はじめに

カリブ海地域は、もともとさまざまな移民¹⁾で形成されてきた複合社会である。900万人にも及ぶアフリカからの奴隷の大多数、ヨーロッパからの植民者及び労働者、中近東、インド、インドネシア、中国などからの19世紀以降の数波にわたる移民の到来が見られた。これらの人口移動は、カリブ海地域への「移入 (immigration)」であった。しかし、とくに19世紀の奴隷解放以降、アフリカ系住民のこの地域からの「移出 (emmigration)」が、恒常的な人口移動の現象として顕著になってきた。これらの移民の原因には社会経済的要因だけでなく、自然環境や歴史文化的要因も考慮されなければならないことは言うまでもない。

まず、移民を生み出してきた理由として、いくつかの原因が考えられる。一つは、奴隷解放直後の元奴隷の心理状態である。奴隷解放によって元奴隷の行動は自由選択にまかされることになった。そこで、多くの人達がプランテーションによる過去の忌まわしい緊縛を嫌って、自由を求めて移民として逃避の道を選んだと考えられる²⁾。この移民の現象は、他方では土地の獲得による小規模自営農民 (peasant)³⁾の創出と表裏一体をなしていた。第二の移民の理由は経済的なものである⁴⁾。近隣の島じまへの移民であろうと、植民地（時代

の) 宗主国へのそれであれ、就業機会と相対的に高い賃金を求めての移民であった⁵⁾。いくつかの島じま(たとえばジャマイカやトリニダード・トバゴ)を除くと、カリブ域内諸島の大半は鉱物資源にも恵まれず、主産業は農業あるいは観光サービス業である。したがって農業以外での就業機会がひじょうに限られている。これらの島じまの抱える「過剰人口」の多くが移民として出てゆくことになった。

このような移民に関する研究は、カリブ海地域からの移民だけでなく、世界中の移民について多く行なわれてきた。移民の受入れ国での文化摩擦・接触・変容の問題、そして最近では移民による送金が故郷の人々、コミュニティーに及ぼす影響などに関しても扱われてきた⁶⁾。しかし、移民を送り出すコミュニティー内の社会経済的環境と移民の関係は、現在までほとんど扱われてこなかった。「親社会からだれが、なぜ移民するのか。移民は故国とどのような関係を維持するのか。人口減少の技術的、社会的、そして思想上の影響はどういったものなのか。このような主題に関する資料はほとんどない」〔Lowenthal and Comitas 1962: 201〕。

とくに、だれが、なぜ移民するのかという研究は現在でも不足している。移民の社会経済的な問題は従来「push-pull」モデル⁷⁾で説明されがちであった。簡単に言えば、就業機会の少ない農業中心の発展途上国(あるいは農村地帯)から、相対的賃金が高く非農業就業機会の多い産業化された先進国(あるいは都市部)へ移民の形で「過剰人口」の移動が起こる。このモデルにしたがえば、あたかも移民人口が一つの単位として同質的に捉えられがちである。たとえば経済的要因が移民の最大の原因であっても、移民となる過程には個々人の異なった背景があり、決定がある。たとえば、移民となる人びとは彼らを輩出する社会では最貧層に属するといった一般的な通念も、移民を一つの単位として同質的に捉える考え方に発している⁸⁾。

しかしながら、一つの小さな農村コミュニティー内でも、農民の社会経済的行動や地位は決して同質的ではなく、平等的なものでもない⁹⁾。コミュニティー内の個人は、各自の限られた資源・能力を生かした適応を行なってきた。適

応が、あるていどの成功を予測した個人の行為だとすれば、移民も適応の一部なのである。しかし、だれもかれもが移民の道を選ぶ訳ではない。むしろ、一コミュニティ内の限られた階層から移民は輩出されてきたと考えてよい。移民は、過去から恒常的に経験されてきたことであり、農業同様に、人びとが生活・生産を維持してゆくうえで適応の一部として比較的容易に採用される行為とみなしうるのである。

「だが、なぜ移民するか」という過去に不足してきた研究課題を、上述したような仮説を実証することによって小稿で考察してゆく。小稿で使用される事例は、カリブ海地域小アンチル諸島の一つ、ドミニカ島で、1982年6月～1983年7月にわたって筆者が行なった人類学的フィールド・ワークによって収集された資料の一部である¹⁰⁾。

II ドミニカ島の概況

ドミニカ島は、カリブ海の東側に南北に連なる小アンチル諸島の一つである。島の南北にはフランス領のマルチニーク、マリー・ガランテ、グアドループなどの島が位置している。約776平方キロメートルの面積のうち約3パーセントのみが沖積平野であり、島の中央を南北に1,400メートル級を含む火山性の山脈が走っている。1493年のコロンブスの第二回航海の際に「発見」された。西欧列強、とくにイギリスとフランスがこの島を領有するために凌ぎをけずったが、1763年のパリ平和条約以降、1978年に独立してイギリス連邦の一つとなるまでイギリス領となった。

険しい地形のために上述のように平地部が少ないが、わずかに分布する平地部は大半がプランテーション（エステートとも言う）に占められている。他方、農民の大半は傾斜地にあるプランテーションの後背地や、尾根や谷に、村や畑を持っている。島にはこれといった鉱物資源もなく、豊富な淡水も未利用のままである。換金用バナナと若干のココナッツの加工業、そして諸外国からの援助が、独立国ドミニカの主要な財源なのである。険しい地形のために国土の大半が農業に不適とされ¹¹⁾、人口密度も他の域内諸島のそれと比較して相当

低い。利用可能な土地が少なく、農業以外の就業機会も極端に少ない。このような自然・社会経済的環境の制約もあって、奴隷解放以降恒常的な移民がドミニカから出ていったのである。

III ドミニカ移民の歴史的変遷

ドミニカに限らず、カリブ域内諸島一般が移民により成る複合社会である、と言うのは間違いではない。ヨーロッパ列強のこの地域への到来以前の現住民であったアラワクやカリブ・インディアンたちは南米大陸から移動してきた¹²⁾。1492年以降、ヨーロッパ諸国人に続いて、プランテーション開発のために連れてこられたアフリカからの奴隷をも移民に加えるならば、まさにカリブ海地域は移民社会なのである。ドミニカの東海岸にあるエステートにおける奴隷解放直前(1817年)の奴隷の出身地別構成を見ると、この状況は一目瞭然である。

表1によれば奴隷189人中、クレオール(creole、現地生まれの奴隷)は144人で、45人がアフリカの諸地域——コンゴ(Congo)、セネガル(Senegal)、イボ(Ibbo)、モコ(Moco)、アッジェイ(Adjay)、バンバラ(Bambara)、エベ(Ebbae)、カーシー(Carsey)の出身者で占められている。とくにドミニカは自由貿易港として奴隷売買を中心とした交易の島として、18世紀以降奴隷解放まで栄えた¹³⁾。

しかし、1833年の奴隷制の廃止と、それに続く1838年の徒弟制の廃止、及びそれに伴ったプランテーション労働力の急減による糖業の壊滅的打撃などが、それまで植民者に緊縛されていた元奴隷の行先を島外へと向けさせることになったのである。この現象は元奴隷が自由人として、自由意思に基づいて選択した最初の移民の波なのである¹⁴⁾。1897年にドミニカの状況を広範に調査した「西インド諸島王立委員会」の報告は、次のように移民の状況を記している。「この〔糖業の失敗〕は、ドミニカからの移民、そしてその結果としての人口減少の原因になった。このような大規模な糖業の失敗は、災害によって起こされたのではない。私たちの前にある証拠は、砂糖キビ栽培と精糖に必要なものと同じ程度の規模で、あらゆる種類の職を供給する他の産業をまったく欠い

ていたのに、人びとがよけいに貧しくなっていることを示している」〔Morris 1897:50〕。「この災難〔糖業の失敗〕に対する部分的な救済は、ベネズエラやカエンヌ〔仏領ギアナ〕への移民に見い出されてきた。しかし、もしも主張されてきたように、1892年の時点で7,000人ほどのドミニカ人がベネズエラで貧困ぎりぎりの状態であり、故郷へ戻りたがっているのなら、この救済はほとんど満足とは見なし得ないのである」〔ibid.: 50〕。このような状態にもかかわらず、金銭で働くために多数の人びとが継続して移民として出ていった。1896年にはベネズエラとカエンヌへ1,284人が出かけた。

上述のように奴隷制廃止とともにプランテーション労働力が激減し、ただでさえ小規模であった砂糖キビ生産も、ドミニカではおぼつかなくなった。この背景にはバルバドス、ジャマイカ、そしてネイビスのような大規模な砂糖キビ生産の競争相手が存在したこともあった。大多数の解放奴隷が過去のプランテーションへの緊縛を嫌って、プランテーションの後背地あるいは内陸部において零細自営農民としての位地を確立してゆく一方で、多くの人たちが海外移民として島を去っていったのである。

この移民の現象は、南米大陸方面のみならず、他の方面へも拡大・継続していった。たとえばパナマでの鉄道敷設や運河の開削、キュラソーでの精油業、そして米国での農業労働者にと、多数の人が島を去っていった。第二次世界大戦前のこの移民の流出はとどまるところを知らず、戦後、1950年代から1960年代前半にかけての労働力不足のイギリスへの移民へとつながっていったのである。この時期のイギリスへの移民は、まず本人がイギリスに落ち着き、そして妻が呼び寄せられ、最後に子供が合流するパターンをとっていた¹⁵⁾。

ところで、これらの移民には渡航のための費用が必要であった。つまり、移民するにもそれなりの経済的裏付けが必要だったのである。費用捻出の一つの方法は、土地を売却することだった。しかし、ドミニカ人の大半は親などから土地を相続するにもかかわらず、もしこれらの土地に対する登記がなされてなければ、土地を売却することができなかった。したがって移民として出る場合の費用捻出も不可能であった。土地の登記を行なうためには測量技師を雇い、

土地局に正式に登録する必要があった。しかし、この一連の手続きには、農民にとっては多額の費用が必要とされた。したがって、実際に使用し、だれしもが本人の土地であることを確認していても、未登記の私有地が多かった。このような私有地の状況に加え、政府管理地の不法占拠者が多かったことも、土地売買を著しく困難にしていた¹⁶⁾。これらのことを考慮すると、比較的裕福であった人びと、すなわち登記費用を捻出できた人には、土地の売却は容易だったと考えられる。その結果、移民のための渡航費用も比較的容易に捻出できただろう。他方、極貧者は土地の登記費用をも捻出できず、結果として渡航費用の捻出が困難だったであろうことは言うまでもない。いずれにしても、土地を売却するならば、農業を放棄することにもなり、故郷へ戻ることをほぼ諦める人のみがこのような決意をしたと考えられる。したがって、帰還を考えていた人は、なんらかの別の方法で渡航費を捻出する必要があった。

1962年にはイギリスで移民法の改正が行なわれ、それまでのように自由な移民ができなくなった。それ以降は、若干の労働者と、すでにイギリス本国にいる移民の肉親のみが、非常に限られた期間入国することができた¹⁷⁾。このようにして第二次世界大戦後のイギリスへの移民は1962年をもってそのピークを終えることになった。

「イギリスへのドミニカからの移民は1953年と1954年に小さい波を伴って始まった。1955年と1957年の間にピークに達した。その後いくらか減少した。そして、1960年～1961年と1962年に再びピークを迎えた。1965年と1969年の期間中、イギリス政府によって通過された連邦移民法の結果として、コントロールされた安定した移民の流れがあった。したがってドミニカ人の移民人口は、1972年までに落ち着いたと言えよう。イギリスでの公式推定移民数は約15,000人とされている」〔Shillingford 1983〕。イギリスにおける移民法は、1968年と1971年にさらに強化され、労働移民の流れは極端に少なくなった。

他方、第二次世界大戦による兵員増加のために労働力不足に陥った米国は、農業、鉄道、そして材木業などの分野に、メキシコを中心としつつイギリス領カリブ海地域諸島からの移民をも促進した〔Marshall 1982:9〕。米国へのカ

リブ域内諸島からの移民は戦後も継続した。長い目で見れば、米国の3つの主な移民関係法案が、イギリス領カリブ海地域諸島民の移民に影響を与えてきたとマーシャルは記している。第1のものは1924年の移民条例であるが、これは1882年の中国人移民禁止条例に表現される最初の法的な移民制限のためのものであった。第2のものは、ウォルター＝マッカラン（Walter-McCarran）条例として知られている1952年の移民条例である。第3のものは、1965年の移民・国籍条例である。これらの諸条例の「結果として1961年から1970年の10年間の米国への西インド諸島人の移民は、1951年－1960年の数の3倍以上の、ほぼ50万人にまで達した」〔Marshall 1982: 9, 52〕。その後、米国への移民は継続したが、1970年代後半からの厳しい米国の移民制限によって著しく減少してきたのである。

イギリス、米国、カナダ¹⁸⁾など、いずれの国も他国からの移民の取り扱いは、各受入れ国の経済動向と微妙に関連してきた。たとえば近年の世界的規模の経済不況は、移民を厳しく制限する方向に動いている。ドミニカからの移民は継続してはいるものの、移民の行先は上述のように大きく変化してきたのである。

以上のように、(1)奴隷解放から第二次世界大戦までのカリブ域内他島への流れ、そして(2)戦後のイギリス、米国やカナダへの域外移民の流れを經過して、(3)再びカリブ海域内へと移民の流れは大きく変化してきた。先進国の経済不況と厳しい移民法の実施と、他方でカリブ海地域での観光産業の発展がこの移民の流れに大きく影響している。次に具体的な事例を用いて、移民、とくに帰還移民と彼らの社会経済的背景との関連について検討してゆくことにしよう。

IV 調査村とその社会経済的背景

調査地となったグレート・リッジ（仮称）は、ドミニカ島の大西洋岸東南部約4.8キロメートル内陸の尾根上に位置している。この村は1900年以前（奴隷解放以後）、大西洋岸に現存するクロス・エステート（仮称）の解放奴隷によ

てつくられた。総世帯数165、人口740人余り(1982年現在)の村の経済は、タロイモなどの根茎類を中心とする生存作物と換金用バナナの生産に基づく農業依存の形をとっている。農業以外には、コミタスがジャマイカの一漁村での漁民の持つ職業の多様性を「職業の複数性」¹⁹⁾と表現したのと同様に、大工を兼ねる者、政府の道路維持の日雇い人夫になる者、あるいはプランテーション労働者になる者などもいて、農業専門の世帯は比較的少ない(約32パーセント)。しかし、非農業安定職、たとえば学校教師、食料雑貨店などを農業とともに兼業する世帯もあり、それに現金収入の過半を頼るケースもある。

1960年代初期に島の西海岸の首都ロゾーからグレート・リッジを結ぶ自動車道路がやっと開通した。この時期まで、グレート・リッジの村びとはもちろんのこと、東南部の村の人びとは徒歩で、頭上に農作物を入れたカゴを運び山を越えてロゾーに出なくてはならなかった。そのため、山奥深く畑がつくられ、政府管理地が次つぎと開墾されていった。村から徒歩で1時間以上の所に畑がつくられることがまれでなかった。村のまわりの畑はほとんどが15度から45度までの急斜面上にあり、開墾も容易ではなかった。開墾された土地のほとんどは正式に登録されたものではなく、それでも親から子へと分割相続されてきた。戦前からプランテーションとの土地の境界をめぐるいざこざが絶えず、村びとは低地へ降りることができず、内陸部の開発は1960年ごろでだいたい行き止まりの状態(飽和状態)になった。1900年代初期には一家をあげてベネズエラへ移った世帯がいくつかあったとも言い伝えられている。

しかし、1960年代初期の首都と村の間の自動車道の完成と前後して、政府とプランテーションの土地販売政策、バナナ栽培用の人工肥料の導入などが相次いで実施された。これらの一連の政策は、村びとの土地利用だけでなく生活一般を徐々に変えるきっかけとなった。自動車道の完成で、人びとは輸送に便利なように奥地の畑を放棄しはじめ、化学肥料は尾根上の地味の悪い農業不適地を「適地化」していった。また比較的低地にある政府やプランテーションの売却地を購入する者も出てきた。換金用バナナはこのような背景のもとでますます広範に栽培されることになった。しかし、生存作物の根茎類の市場は微々た

るもので、バナナの市場価格も低迷の状態が今日まで続いてきた。村での非農業職は大工などの兼業職以外には非常に限られており、しかもドミニカ国内一般でもそれを得るのは非常に困難である。こういう村そして島の状況を反映して、村からの移民が継続してきたのである。

V 調査村の未帰還移民

グレート・リッジでの全世帯を通じて行なったインタビューによれば、1956年以來、カーニバルやクリスマス時の短期の訪問（帰郷）を除けば、未帰還の海外移民が134人いる。これらの134人の未帰還移民は、永住者または市民権取得の異邦人として、表2に示されるような国ぐにで暮らしてきた。同表に見られるように、グレート・リッジからの移民のパターンは、1950年以來変化してきた。すなわち、移民先、目的、滞在期間そして移民年令などの内容が著しく変化してきた。1950年代から1970年代初期にかけては、ほとんどの移民がイギリス、米国そしてカナダへと去って行った。1950年代のイギリスへのグレート・リッジからの移民は、移民総数の82.4%を占めた。1960年代のイギリス、カナダ、米国への移民はそれぞれ同時期全体の54.1%、5.4%、13.5%であった。これら3カ国への移民は合計27人（73.0%）であった。1970年代、さらには1980年代になると、これら三カ国への移民の絶対数、百分率はともに相対的に減少した。1970年代のイギリス、カナダ、米国への移民は、それぞれ15.78%、10.52%、1.75%と記録されている。これら三カ国への移民総数は16人（28.0%）であった。

他方、グレート・リッジからカリブ域内他島への移民パターンは、上述の先進国へのそれとは異なっている。1950年代には1人だけがグアドループへ移って行った。しかし、1960年代になると、米領ヴァージン諸島（セント・トーマス、セント・クロアなど）、仏領グアドループ、オランダ領セント・マーティンへの移民が、グレート・リッジからの移民総数のそれぞれ5.4%、10.8%、2.7%を占めるようになった。これらの外地への移民の絶対数、百分率ともに1970年代、1980年代にかけて急速に増加してきた。1970年代、オランダ領セン

ト・マーティン、米領ヴァージン諸島、そして仏領グアドループへと、それぞれ24.6%、21.1%、19.3%のグレート・リッジからの移民が去って行った。これらの地域への移民総数は、全体の64.9%だった。この傾向は1980年代にも持続した。

この変化には種々の理由がある。グレート・リッジからの移民のパターンはカリブ域内一般のそれと、ほぼ同様のコースをたどっている。変化の要因の一つは、受入れ国の移民法の厳格化と経済状態の悪化（ないしは好転）であろう。またドミニカからのカリブ域外地域への旅費の上昇なども、要因の一つとしてあげられるだろう。

移民の年齢を見てみると、グレート・リッジからの移民のほとんどが働き盛りの青年であった。表3がこの傾向を示している。1980年代には、グレート・リッジからの移民のほとんどが30才以下の若者であった（男が7人、女が14人からなる21人中16人がそうであった）。

有限の土地、限られた非農業職への就業機会、そして増加する現金所得の必要性などが、村びとたちを移民へと走らせてきた。化学肥料と他の化学薬品を採用する集約的農業は、少ない労働力で昔より相対的に多くの人口を扶養できるようになった。もともと生存作物は比較的容易に栽培できた。たとえ基幹労働力となる男性が移民として出ても、残された女性が畑の世話をすることも可能である。もし、年寄りや、身体の不自由な人が残されても、彼らは親族や隣人たちによって最低限の世話をしてもらえた。

グレート・リッジの移民と村に残った家族との間の紐帯とコミュニケーションは、様ざまの形で維持されている。最も重要なものは、移民からの送金であろう。ほとんどの移民送出世帯が、クリスマスやカーニバルの期間中に少額の金、衣類または他の物品を受取ってきた。しかし、送金額はいくつかの例外を除けば、家計を大きく補助するほどのものではない。価値はいずれの場合をとっても5～10ポンド（約2,000～4,000円）の間に分布している²⁰。いくつかの世帯は、衣類、靴、台所用品、ジャガイモ、食用油などを受取った。しかし、どの世帯も恒常的に送金を受取ったことはない。村びとたちは口ぐちに言う。

「俺たちはスコッツヘッド、スフリエヤラ・プレインの奴らのように、外部からの金に依存してないんだ。俺たちは自分の土地で一生懸命働くんだ」²¹⁾。

VI 調査村の帰還移民

「帰還」移民とは、小稿では、一度海外へ移民として出、1983年までに故郷の村に戻り、居住している人たちを指す。1983年の時点で、グレート・リッジには少なくとも26人の海外生活経験者がいた。このうち16人が移民として労働を目的に海外へ渡った。表4に示されているように、これらの移民にはいくつかの特徴が見い出される。

(1) 移民の最初のグループは、1950年代にイギリスへ渡った人たちである。彼らの年齢は、移民当時では、ほとんどの人が40才代であった、イギリスでの彼らの職業はそれぞれ異なっていたにもかかわらず、各人は新しい事業を始めるに足る金を村へ持ち帰った。彼らの一人は雑貨店を開いた。他の三人はトラックまたはヴァンを購入し、貨客を運んだ。もっとも彼らの始めた商売は、どれもうまくゆかなかった。彼らの一人は息子たちを海外で教育させた。すべてが必ずしも成功したわけではなかったが、帰還移民たちは村で様ざまの新しいアイデアを実行することができた。

彼らのうちの一人だけ（Ⅷで後述するケースⅠの男）が、イギリスに長期間とどまることを意図していた。しかし、彼の妻との間の関係が悪化したことと、彼自身が病魔に襲われたことによって1970年代初期に帰村した。彼を除く他の全員が1948年のドミニカの選挙人名簿に記載されていた²²⁾。彼らは移民する前には、コーヒー生産と適度な規模の畑からの収入があった。しかし、彼らは村で最も裕福な階層に属していた訳ではない。彼らは1948年の時点では中ランクに評定されていた（ランクについては後に詳述する）。1950年代初期にはイギリスまでの片道船賃に70ポンドを要した²³⁾。貧しい階層の人たちにとって、2～3年の移民の後に帰村することを意図していたなら、このような額の金を出資することは不可能に近かった。

(2) 戦後のグレート・リッジの帰還移民の第二波は、ほとんどが近隣の島々

からのものであった。いく人かの人たちは単なる訪問者、観光者として他島を訪れている。いく人かは特別の奨学金を貰っており、一般的な移民とは区別されている。しかし、多くの人たちは労働者としての移民であった。彼らの年齢は、ほとんどが20才代であった。このことは、彼らが、イギリスへの1950年代の移民たちよりも20才近くも若かったことを示している。第二波の移民は、帰村後なんの新しい事業をも始めることができなかった。なぜなら、彼らは事業を始めるに足るだけの金を持ち帰れなかったからである。他国での生活費は、ドミニカでのそれよりも高い。海外で移民がいくら相対的に高い賃金を得ても、彼らはそのほとんどを生活費に費さなくてはならなかったのである。若い帰還移民の多くが、帰村後細々と農業に従事している。食べるだけなら村に在る限りなんとかなった。このように、第一波の帰還移民と第二波のそれらとの間には著しい相違がある。つまり第二波の帰還移民は移民先に「約束された土地」を見い出せなかったのである。

Ⅶ 帰還移民と村における社会経済的ランク

1982年の時点で、総世帯165（総人口746人）のうち、村びと自身によるインフォーマルなランキングによると、11世帯が上ランク、46世帯が下ランク、そして残り108世帯が中ランク層に評定された²⁴⁾。このランキング評定の基本的要因として、各世帯の土地（耕地）所有規模、家畜所有規模、労働力、そして職業の4つがあげられた。上ランク世帯の多くは、非農業安定職と大型家畜（牛）、中ランクでは自営農業と雑業（大工など）と中型家畜（羊、山羊、豚など）、そして下ランク世帯では、農業と養鶏または賃労働といった組み合わせが多い。下ランクと中ランク世帯間の最大の違いは、土地所有規模の違いに由来し、中ランクと上ランク間では非農業安定職を持っているかどうかが決定的要因となっている。ちなみに、グレートリッジでは、二世帯以上、上ランクに属しつづけた家系はない。このことは、各ランク間に浮沈の流動性が存在していることを意味している。

表5のⅠ～Ⅳを参照すると、いくつかの興味ある事実が明らかとなる。その

一つは、帰還移民を輩出した世帯の土地所有規模である。165世帯の平均土地所有面積と比較すると、移民輩出世帯のそれは約2倍足らずにもなっている。つまり、上ランク世帯の平均よりもはるかに高い数値を示しているのである。同じ中ランク内でも、移民輩出世帯の土地所有面積は、中ランク世帯平均よりも高い数値を示している。この土地所有面積に関してだけでなく、さらに各ランク世帯当たりいくつの耕地を所有するかを見ると、移民輩出世帯は平均より1畑多く所有していることがわかる。土地所有に見られるこれらの移民輩出世帯の特徴は、所得の面にも現われている。つまり、165世帯ならびに中ランク世帯の平均所得額よりも、移民輩出世帯のそれは、はるかに高い数値を示している。これらの所得は、移民輩出世帯の職業分類を見ても明らかなように、自営農業のみ、あるいは自営農業と大工などの副業からの収入で構成されているのである。

上に見た統計結果は、帰還移民を輩出する世帯の特徴をとくに良く示していると考えられる。(1)その特徴の第一は、これらの移民が中ランクでも、その上層に位置する世帯から輩出されてきたことである。(2)第二の点は、移民輩出世帯の職業が、自営農業のみ、あるいは自営農業プラス雑業のみで構成されているという事実である。政府関係の職、村の食料品店経営、そして村の学校の教師などの非農業職には、これら移民輩出世帯の人たちは就いていない。(3)第三点は、耕地所有規模、および平均畑地数に見られるように、総世帯平均以上に所有し、農業という「伝統的」産業に専念してきたという事実である。(4)第四点は、第三点と関連して、営農努力の結果、所得水準が平均よりも高くなっているという事である。

以上のような諸特徴をまとめてみると、次のようにいえる。すなわち、帰還移民の輩出世帯は、中ランク上層であり、変化を好むというよりも、むしろ保守的な生き方を維持している。その結果として、「伝統的」産業である農業（および雑業）に従事し、それからの収入を補足する意味で移民を輩出してきたのである。

VIII 帰還移民の4つの事例

具体的に、帰還移民4人の移民の体験を下記に示そう。

ケースⅠ 男(65才). 移民先: イギリス. 移民期間: 1958~1972年(第一波移民). 移民先での職業: 工場労働者.

彼は1914年にグレート・リッジで生まれた。15才の時に父親が亡くなり、それ以降母親に育てられた。19才の時に母のついで、首都ロゾーの大工見習いに出たが、その後、村に戻って母親に土地を分けてもらい、細ぼそと農業を営んでいた。しかし、農業だけを行なっても生活は向上しないと真剣に思うようになった。それで1958年にドミニカを去って、イギリスへ渡った。イギリスでの生活は彼にとっては楽しいものだった。工場労働者として、一カ所で働き続けたが、ある時糖尿病にかかってしまった。医者は悪くなっていた左足のかかとの部分を切断したが、かえって悪化してきたのでひざ以下をも切断してしまった。義足を作ったが、満足に働くこともできないので、故郷へ戻ることを決心した。彼は1970年に一時的に里帰りをし、1972年に本格的に村に帰還した。

彼のイギリス行きは、結婚して5年目のことだった。イギリスへ渡ってから5年間、彼は村に残った妻に仕送りをしたが、6年目に妻を呼び寄せた。彼らは8年間イギリスで共に暮らした。病気になってから彼は、妻にたいし共にドミニカへ戻ってくれるように頼んだが、妻は同意しなかった。会社は彼に対して帰りの船賃と荷物の運送賃を払ってくれたし、彼に対して年金を支払うことも約束した。帰村以来彼は少々バナナを換金用に栽培している。このバナナからの収入と年金で、細ぼそと暮らしている。妻はイギリスに居残っているが、別離の時以来、音信不通のままである。彼にとっては移民の時代は楽しさと、苦しみの混った複雑な期間だった。

ケースⅡ 男(26才). 移民先: オランダ領セント・マーティン. 移民期間: 1979, 1981~1983年(第二波移民). 移民先での職業: 建設労働者.

彼は1983年までは、移民先で楽しい毎日を過していた。モダンな衣類やカセ

ット・ラジオやカメラに賃金を費し、村の家族には送金をしたことがなかった。しかし、1983年になって彼は、グレート・リッジから一緒に来ていた兄弟同様の友人が女と親しい関係になり居辛くなったので、その男と同居していたアパートを去ることになった。下宿屋に一人で移り住むことになったが、まもなくノイローゼにかかり、仕事もやめてしまった。友人がドミニカに連れて帰り、ロゾーにある国立病院の精神病棟に収容された。後日彼はノイローゼから回復し、グレート・リッジの両親の家へ戻った。父親の休耕畑に手を入れ、タロイモづくりを始めた。しかし、いつまでも畑作をするつもりはなく、いつか再び海外で働きたいと思っている。とくに次の機会には、兄の一家が1983年以降移民している米領ヴァージン諸島へ行きたいと考えている。グレート・リッジだけでなく、ドミニカは「スロー」で、希望がないと彼は常日頃ほやいている。

ケースⅢ 男（42才）。移民先：グアドループ。移民期間：1982～1983年（第二波移民）。移民先での職業：農業労働。

彼は、1982年にグアドループへ去る前に結婚した妻との間に9人の子供がある、小規模自営農民である。昼間は畑仕事をやり、夜は村を下って約4.8キロメートルの所にあるバナナ箱詰工場の夜警をやっている。義理の妹は長い間グアドループにいた。彼は1982年9月に友人や家族に別れを告げて突然村を去った。後ほど11月に彼の長男が加わった。長男は建設労働者になったが、村を去ってからこの長男は母親にさえも一通の手紙をも書いていない。父親は、1983年2月のカーニバル直前に村へ戻ってきた。

彼によると、グアドループは非常に「ファーストな」国だ。グアドループの人たちは、ドミニカで一般的に食用される鶏の骨を食べない。彼らは肉の部分のみを食べている。食料と家賃が相対的に高いにもかかわらず、賃金が高い。畑作の場合、一日100～150フラン（約4,000～6,000円）が支払われる。ドミニカでの畑仕事の平均賃金が1日当たり10～15E Cドル（約900～1,300円）であるので、グアドループの賃金は非常に高額であると考えられている。彼は再びグアドループへ働きに行く予定である。

ケースⅣ 男(26才). 移民先: 米国. 移民期間: 1981~1982年. 1982~1983年(第二波移民). 移民先での職業: 砂糖キビの収穫作業.

彼は、3人の子持ちの女と同棲関係にあり、1人の息子をもうけた。1982年10月に彼は、砂糖キビの収穫作業の季節労働者としてフロリダへ去った。そして、1983年4月にドミニカに戻ってきた。フロリダでの時給は4.75ドルだった。彼は6カ月間働き、総収入4,900ドル余りを得た。その中から975ドルをキャンプの居住費に、2,000ドル余りを食費とその他の用途に費した。1,000ドル足らずの残りからラジオ(約150ドル)、そして金の指環と首飾りとを、母親と上記の女性のために購入した。彼は6カ月間村で休養し、再び米国へ渡る予定である。彼はこれをすでに二度繰りかえしてきた。村では上記の女性と同棲し、不定期的にプランテーションへ労働しに出かける。

IX 結 語

表2、および表4や上述の事例などからもわかるように移民はグレート・リッジで恒常的に見られる現象である。1950年代以降、政府やプランテーションの土地売却によって比較的平地部の土地も購入可能になったとは言え、村びとの新規の土地獲得には限度があった。それに加え、非農業就業機会の少なさ、それに現金の必要性の増加などが、村のうちのある人口が恒常的に移民として流出することを余儀なくさせてきた。そして、未帰還移民が将来故郷に戻ってくる可能性はあるが、おそらく彼らは村の家族地²⁵⁾に落ち着くことになるのだろう。

移民のほとんどが中ランク世帯から輩出されてきたが、明らかに彼らは移民になることによって農業所得を補足しようとしたのである。1960年代以降の移民は、1950年代の移民とは異なり、村で新しい事業を行なうことができなかった。そして、1960年代から現在まで徐々にカリブ域内への移民が増加してきたという事実は、移民が、中ランクに評定される世帯の人びとにとってのとり得る適応の一つであったことを示唆している。彼らは、移民のための渡航費用ぐらいはなんとか工面できた。それに比較して上ランク世帯は、非農業安定職を

持ち、移民するには及ばない。下ランク世帯の人たちは、移民として渡航する費用さえ捻出できないのである。

農民社会としてのグレート・リッジが、静態的なものではなく、内部的にも流動性を持つ社会であることはすでにふれた。つまり上、中、下というふうには、村びとの社会経済的階層をインフォーマルに評定できても、必ずしも同一家系が同じランクに固定することなくつねに流動的なのである。このような点と、移民の大半が中ランクから輩出されてきたという傾向を考えてみれば、移民輩出世帯もまた流動性を秘めているということになる。たとえ現在移民を輩出できない下ランク世帯でも、なんらかの手段で土地所有規模を拡大し、所得を増加させることができたなら、中ランクに移行する可能性がある。その結果として移民送出の基礎が準備されることになる。他方、たとえ農業経営規模を拡大しなくても、非農業安定職を得て上ランクに移行し得たような世帯は、移民によって家計を補足する必要性もなくなるのである。いずれにしても、社会経済的中間層と移民との関連性が著しく高いことはまちがいない。

以上のことを考慮すれば、次のような2点を指摘することができる。

(1) その一つは、移民を輩出した社会経済的階層についてである。マイヤーズによれば、彼の調査したドミニカ西岸のコミュニティーでは、移民がコミュニティーに及ぼした影響はほとんどなかった。その理由としては、移民の性別がバランスのとれたものであったことや、彼らの大半がいわゆる未熟練労働者からなる「過剰」人口層から成っていたことなどが挙げられている。帰還移民は特殊技能を持たず、移民前よりも「良い」職業を獲得できるほどの訓練にも欠けている。さらに大半の帰還移民は、米国やイギリスのような先進国からの帰還者ではなく、ドミニカで就いていたと同様の職にカリブ域内他島の移民先で就いていたからであると、彼は結論している〔Myers 1976〕²⁶⁾。

グレート・リッジでは、1950年代、1960年代の移民は、村に帰還後なんらかの新しい事業を始めることができた。しかし、1970年代以降になると小事業すらおこせない状況になる。移民による資金の蓄積が、新しい事業を始めるには小さすぎたのである。また、マイヤーズの調査したコミュニティーのように、

帰還移民の移民先での職業は、帰還後コミュニティー内またはドミニカ内一般で、ほとんど応用の場も、就業機会もなく、移民経験は帰還後ほとんど役立たなかった。こういう意味においても、帰還移民の社会経済的影響力は昔と比較して小さくなってしまった。したがって、社会経済的中間層から輩出された移民は、帰還後も再び中間層に戻る状況が続いてきたのである。マイヤーズ論文では、移民経験者のコミュニティー内での社会経済的位置については触れられていないが、ほとんど農民から成るグレート・リッジの状況と類似していると考えてよい。帰還移民がコミュニティーになんら大きな影響を及ぼさない層、つまり社会経済的中間層の人びとが移民の中心となり、自らの世帯の補足的収入源として移民を行なってきたのである。

(2) 第二の注目すべき点は、帰還移民が社会経済的中間層のなかでも上層から輩出されてきたということである。デウォルトによるメキシコのエヒード²⁷⁾における農民の平等性に関する研究では、新しい知識・技術の例としての化学肥料の導入とそれを受け入れる農民の社会経済的階層についての関連性が取扱われている。彼によると、中層のなかでも上位層の人たちが、肥料を含めた新技術を受け入れた最後のグループであり、その保守性は著しい〔Dewalt 1976〕。まったく異質な農村コミュニティー間の比較ではあるが、デウォルトの調査結果と、小稿で扱われた移民輩出世帯の示した諸特徴とはある意味で類似している。農業（および大工などの副業）ならびに移民は、調査したグレート・リッジに限らず、カリブ域内の農民社会では最も「伝統的」な社会経済的要素なのである。これらを維持・存続させ、そこに生活・生産の途を見出すという選択の姿勢は、「保守性」である。つまり、これらの「伝統的」パターンを踏襲すれば、大きな利益もえられないかわりに、たいしたリスクもまたないということなのである。

もちろん、別稿で示したように²⁸⁾、ランク間の流動性は過去において存在したし、将来も続くであろう。そして、中ランク上層に評定される世帯のランク間移動が生じる可能性がある。しかし基本的には中ランク、とくにその上層世帯の適応形態は「保守的」であり、過去に経験してきたものを踏襲し続ける可

能性が強い。カリブ海地域諸島社会の移民の研究は、移民を輩出する社会の送金による影響にまで手がつけられるようになった。しかし、小稿で扱ったように、送り出す社会の基本的な社会経済的条件の分析が、「だれが、なぜ移民するのか」という基本的な問いに答えるためには必須なのである²⁹⁾。

注

- 1) 小稿では、「移民」は、英語の migration と migrant の双方の意味で用いられている。大ざっぱに言えば「移民」は「人びとの空間的移動」であるが、小稿では海外への移動には限定して使われている。
- 2) Lowenthal 1961.
- 3) “Peasant” の定義については、Eguchi 1984: 13, を参照のこと。
- 4) Hiro 1973: 21.
- 5) Welch 1968: 231.
- 6) 1900年-1975年におけるカリブ海地域の研究目録を広範に記載する *The Complete Caribbeana 1900-1975* には、移民を主要項目として扱った報告が111件、そして移民を副次的に扱った報告をも含めると236件所収されている〔Comitas 1977〕。最近では送金と、それによって移民輩出村が被る影響についてルーベンスタインが分析している〔Rubenstein 1983〕。
- 7) Lee 1969, を参照。
- 8) たとえば、「国際移民はもっとも絶望的に貧困にあえぐ、環境に不適合な見捨てられた人であるという一般の通念は、次のような証拠によって否定される。たとえば、アイルランドの飢饉では、比較的裕福な人たちのみが大西洋を越えて移民するだけのエネルギーと旅費をかき集めることができた」〔Lowenthal and Comitas 1967: 202〕。
- 9) 拙稿 1985, を参照。
- 10) この調査は、ノース・カロライナ大学人類学科の博士論文の資料収集の一環として実施された。調査は下記の諸機関に援助された。名を表して謝辞に代える。ノース・カロライナ大学大学院 R. J. Reynolds Industries Research Fellowship, ノース・カロライナ大学 Herbert and Guelda Beckerath Scholarship, Sigma Xi: Scientific Society of North America for the Encouragement of Scientific Research.
- 11) Morris 1897: 2.
- 12) Evans 1967.
- 13) 1766年の英国自由貿易港条例によって、ジャマイカの4港とドミニカのロゾーとプリンス・ルパート・ベイの2港が外国船舶にたいして開港された〔Parry and Sherlock 1974: 131-2〕。
- 14) 奴隷制廃止以前、たびたび奴隷がプランテーションから逃亡し、森林の中に自らのコ

- コミュニティーを築いた。ドミニカでは小規模だったが、スリナム、仏領ギニア、ジャマイカなどでは現在でも逃亡奴隷（マルーン）によって創設されたコミュニティーが存続している〔Price 1979〕。
- 15) Hiro 1973: 20.
- 16) Parliament of Great Britain 1960: 5.
- 17) Freeman 1982: 30-31; Marshall 1982: 52.
- 18) 「1962年以前、カナダの移民政策は、潜在的移民の社会的、民族的、人種的背景に関して差別的であった。1962年に教育と職業の資格に主に基づいたポイント・システムが制度化され、イギリスでのますます厳しくなってきた移民法と相まって、カナダへの移民率に直接に影響した。……2年前〔1980年〕、全移民についての年間許容数が確立されたが、これは明らかに非白人移民の流入を押えることを目的にしていた」〔Frances 1982: 9〕。
- 19) Comitas 1964.
- 20) グレート・リッジの一组の老人夫婦は、1979年のハリケーン・デーヴィッドによる家屋の被害を補修するために、英国在住の息子たちから多額の送金を受け取った（額不詳）。別の世帯はグアドループにいる娘たちから次つぎと5台ものガス・オーヴンを受け取った。調査時では、そのうちの1台のみが使用中であった。
- 21) スコッツヘッド、スプリエは、島の西南岸沿いの村である、この地域はとくに地味が悪く、農業にも不適であり、昔から移民を多数送り出してきた。そのため、多くの世帯が、東南岸沿いのラ・ブレインにおけるように移民の送金に依存している。
- 22) Government of Dominica 1948.
- 23) 当時の納税義務者、すなわち投票有権者の条件が、100ポンド以上の価値の不動産の所有者、なないしは年間収入30ポンド以上の所得のある者となっていた。このことを考えると、70ポンドは相当な負担であったらうことは言うまでもない。
- 24) 抽稿 1985、を参照。
- 25) 「家族地」とは、一人の祖先の土地が未分割のまま子孫に継承された土地のことである。子孫のだれもが使用する権利を持つが、一般的には住居がこの上に建てられる場合が多い。農作物をこの土地で栽培する場合、短期で収穫できる根茎類が作られるのが一般的である。村を去っていた人が戻ってき、どうしても必要な場合には、家族地に住居を設けることが認められる。グレート・リッジだけでなく、ドミニカ、そして他のカリブ域内諸島社会に広く存在している。
- 26) 「イギリスへ来る西インド諸島人は、ほとんどが手仕事職に集中してきた。1966年の標本センサスは、ジャマイカ人の男の94%そして他のカリブ海諸国からの男の84%が手仕事職に就いていることを報告した」〔Freeman 1982: 33〕。
- 27) エヒードとは、メキシコ革命の後、大工ステートから没収された土地を配分され、そ

こで働くために組織され、最小20人の農民から成るコミュニティである。デウォルトの調査したエヒードは、メキシコ・シティーから約160キロメートル離れた所に位置している。このエヒードは異なる、隣接した3つのコミュニティからの人たちを含んでいる。エヒードが確立された1933年には、ほぼ各家族が土地の権利を持っていたが、後の急速な人口増加によって多くの土地無しの人を生むことになった。

28) 抽稿 1985, を参照.

29) 小稿では、未帰還移民や国内移民（町への移動）についてはほとんど扱われなかった。これらの移民をも含めて総合的に、移民輩出社会の社会経済的条件と「だれが、なぜ移民するのか」および「どのように」という問いを関連させて研究する必要があるだろう。それに加えて、カリブ海地域社会の場合には、自然環境、歴史的背景、旧植民地宗主国との関係などもあわせて、総合的に移民問題が扱われる必要があることを付言しておく。

表1 1817年におけるクロス・エステートの奴隷の出身地別人数

	男	女	合計
ドミニカ	72	72	144
コンゴ (Congo)	6	0	6
セネガル (Senegal)	1	3	4
イボ (Ibbo)	9	15	24
モコ (Moco)	3	2	5
アッジェイ (Adjey)	1	2	3
バンバラ (Banbara)	0	1	1
エベ (Ebae)	0	1	1
カーシィ (Kirsey)	0	1	1
合 計	92	97	189

"Dominica. General Resistry of Slaves in this Island taken in 1817, Confirmably to an Act of the Legislation." Roseau, Dominica. より作成.

表2 ドミニカ島グレート・リッジからの移民の動向：性別による移民先の受け入れ国または地域別

	イギリス		カナダ		米 国		米領ヴァージン諸島		カリブ海諸島	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
-1949	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
1950-1959	12	2	0	0	1	0	0	0	0	2
1960-1969	10	10	1	1	4	1	2	0	4	4
1970-1979	3	6	3	3	1	0	7	7	16	11
1980-	1	1	0	0	3	2	0	0	3	11
合 計	26	19	4	4	9	3	10	7	24	48

注) これらの移民はグレート・リッジから輩出された。彼らは海外で続いて働き続けた者、又はすでに、海外で永住権を持っている。グレート・リッジに戻り、現在暮している者は上の数に含まれていない。カリブ海諸島のうちオランダ領セント・マーティンとグアドループが主要移民先である。

表3 グレート・リッジからの年令別移民統計

	-1949年	1950-1959	1960-1969	1970-1979	1980-
-20才	0	0	0	7	8
21-30	0	0	0	20	8
31-40	0	2	15	25	5
41-50	1	5	8	4	0
51-60	0	0	10	1	0
61-	1	10	4	0	0
合 計	2	17	37	57	21

表4 グレート・リッジの帰還移民

性別	現在の 年齢	移民時の 年齢	移民先	期間	移民先での職業	グレート・ リッジでの ランク
男	70	45	イギリス	1958-1962	工場労働者	中ランク
男	74	49	イギリス	1958-1961	工場労働者	中ランク
男	70	45	イギリス	1958-1960	鉄道労働者	中ランク
男	60	35	米 国	1958-1959	タバコ関係労働者	中ランク
			イギリス	1959-1961	鉄道労働者	
男	65	40	イギリス	1958-1972	工場労働者	中ランク
女	52	29	グアドループ	1960-1963	通訳	中ランク
男	38	25	セント・クロア	1969-1971	家内サーバント	中ランク
男	37	26	セント・クロア	1969-1971	菜園労働者	中ランク
男	25	22	蘭領セント・ マーティン	1979, 1981-83	建設労働者	中ランク
男	40	39	カナダ	1982, 1983	家族農場労働者	中ランク
男	34	32	グアドループ	1980-1982	自動車運転手	中ランク
男	38	36	セント・トーマス	1981-1983	雑業	下ランク
男	51	?	トリニダッド	不明	不明	中ランク
男	30	28	米 国	1981-1982	砂糖キビ収穫労働者	中ランク
男	26	24	米 国	1981-1982	砂糖キビ収穫労働者	中ランク
				1982-1983		
女	26	23	ベネズエラ	1980-1981	工場労働者	中ランク
男	26	24	グアドループ	1981	オバ訪問	中ランク
女	26	25	リビア	1982	奨学生	中ランク
女	60	59	グアドループ	1982	娘訪問	中ランク
男	32	31	グアドループ	1982	妹訪問	中ランク
女	21	19	セント・クロア	1982	?	上ランク
女	72	68	米 国	1979-1983	息子訪問	中ランク
女	30	23	セント・クロア	1976	妹訪問	中ランク
男	37	23	グアドループ	1969	観光	中ランク
男	35	31	ジャマイカ	1979-1982	奨学生	上ランク
男	50	43	アンティグア	1976	父訪問	中ランク
男	30	26	蘭領セント・マーティン, フランス, グ アドループ等	……	作家・歌手・画家	下ランク

表5 移民輩出世帯の諸条件

I 耕地所有面積

耕地面積 (acre)	世帯数	165世帯平均	3.7 acre
0	0	下ランク平均	1.05 acre
1 ≤ <2	2	中ランク平均	4.74 acre
2 ≤ <3	0	上ランク平均	5.24 acre
3 ≤ <4	0	移民輩出世帯平均	7.0 acre
4 ≤ <5	2		
5 ≤ <10	6		
10 ≤ <20	3		
合計	15		

II 畑地数 (飛畑数)

飛畑数	世帯数	165世帯平均	2地
0	0	移民輩出世帯平均	3地
1	3		
2	2		
3	4		
4	5		
5	1		
合計	15		

Ⅲ 総 収 入

収入（\$EC）	世帯数	165世帯平均	\$ 3,292 EC
0 ≤ <500	1	中ランク平均	\$ 3,297 EC
500 ≤ <1000	2	移民輩出世帯平均	\$ 5,183 EC
1000 ≤ <2000	1		
2000 ≤ <3000	2		
3000 ≤ <4000	1		
4000 ≤ <5000	3		
5000 ≤ <10000	3		
10000 ≤	2		
合 計	15		

Ⅳ 職 業 (単位：世帯数)

職 種	165世帯	移民輩出世帯
無 職	9	0
非農業職のみ	12	0
ラムショップ+農業	5	0
農業雇用労働のみ	3	0
自営農業のみ	53	7
自営農業+他の雑業	83	8
合 計	165	15

参 考 文 献 目 録

Comitas, Lambros

1964 "Occupational Multiplicity." In: *Symposium on Community Studies on Anthropology*, edited by Viola E. Garfield and Ernestine Friedl. Proceedings of the American Ethnological Society: 41-50.

1977 *The Complete Caribbeana 1900-1975*. Vol. 1. New York: Kto Press.

Dewalt, Billie

1975 "Inequalities in Wealth, Adoption of Technology, and Production in a Mexican Ejido." *American Ethnologist* 2 (1): 149-168.

Eguchi, Nobukiyo

1984 Relative Wealth and Adaptive Strategy among Peasants in a Small Village Community of Dominica, West Indies. Unpublished Ph. D. dissertation. Chapel Hill: Department of Anthropology, University of North Carolina.

江口信清

1985 「農民間の非平等性とランキングシステム：ドミニカ農民の事例研究」, 『民族学研究』49巻4号：220-242.

Evans, Clifford

1967 "The Lack of Archaeology on Domiuica." *The Proceedings of the Second International Congress for the Study of Pre-Columbian Cultures in the Lesser Antilles*. St-Ann's Garrison, Barbados: 93-102,

Frances, Henry

1982 "A Note on Caribbean Migration to Canada." *Caribbean Review*, XI (1): 38-41.

Freeman, Gary P.

1982 "Caribbean Migration to Britain and France." *Caribbean Review*, XI (1): 30-33, 61-64.

Government of Dominica

1984 *Voters List*. Roseau: Government Printing.

Hiro, Dilip

1973 *Black British, White British*. New York and London: Monthly Review Press.

Lee, Everett S.

1969 "A Theory of Migration." In: *Migration*, ed. J. A. Jackson. London: Cambridge University Press.

- Lowenthal, David
 1961 "Caribbean Views of Caribbean Land." *The Canadian Geographer* 5 (1): 1-9.
 ——— and Lambros Comitas
 1962 "Emigration and Depopulation: Some Neglected Aspects of Population Geography." *Geographical Review*, vol. 52: 195-210.
- Marshall, Dawn I.
 1982 "The History of Caribbean Migrations: The Case of the West Indies." *Caribbean Review*, XI (1): 6-9, 52-53.
- Morris, D.
 1897 *Report of the West India Royal Commission*. London: Her Majesty's Office.
- Myers, Robert A.
 1976 "I Love My Home Bad, But..... Unpublished Ph. D. dissertation. Chapel Hill, North Carolina: Department of Anthropology, University of North Carolina.
- Parliament of Great Britain.
 1960 *Report of the Delegation Appointed to Visit Dominica*. Barbados: Government Printing Office.
- Parry, J. H. and Philip Sherlock
 1974 *A Short History of the West Indies*. (2nd edition). New York: St. Martin's Press.
- Price, Richard
 1970 *Maroon Societies*. New York: Anchor.
- Rubenstein, Hyme
 1983 "Remittances and Rural Underdevelopment in the English-Speaking Caribbean." *Human Organization*, Vol. 42(4): 295-306.
- Shillingford, R. A. C.
 1983, May 10. Personal letter to the Author.
- Welch, Barbara
 1968 "Population Density and Emigration in Dominica." *The Geographical Journal* 134(2): 227-235.